大村西崖著『密教発達志』訳注研究Ⅱ-(1)

元 山 公 寿

はじめに

本研究は、大村西崖(1868~1927)によって著された『密教発達志』を書き下して、現代の研究成果を参考にしながら、詳細な脚注を加えることを目的としている。本論文は、昨年までに発表したものの[1)]続編で、第二巻第二章の「初唐」の第1節「唐の波頗の訳経」(底本の179頁)より、第5節「西域南蛮の外道諸神の崇拝」の第9項「穌那天」(底本の203頁)までである。

以下に、訳注に当たっての凡例を記す。

凡例

一、大村西崖著『密教発達志』(国書刊行会、1972覆刻)を底本とした。

二、旧漢字は、当用漢字に改めた。

三、書き下すに当たって、可能な限り、大村の返り点にしたがい、適宜、段落分けをした。

四、大村による割り注は〈　〉で示した。

五、経典名や著作名には『　』を、引用文には「　」を附した。

六、人名には、可能な限り［　］によって生没年、国王の場合は在位を補い、インド名が附されていない場合には、そのインド名を補った。

七、地名に関しても、可能な限り［　］によってインド名、及び現在の地名を補った。

八、年号に関しても、［　］によって西暦年を補った。

密教発達志巻二

日本　大村西崖撰

一、初唐

1、唐の波頗の訳経

唐の沙門波羅頗迦羅蜜多羅［Prabhākaramitra, 565~633］〈作明知識、又、明友、光智〉、略して波頗と云う。中印度の人にして、刹帝利の種なり。曽て那爛陀寺［Nālandā］に游学す。伝化を志し、展転北行して、突厥［Türk］に達す。葉護可汗［Ton Yabghu Qaghan, 618?~628］、請いて、戒主と為らしむ。武徳九年［626］十一月二十日、高平王［李道立、~627~650?］に従い、京師に至り、勅して大興善寺に住さしむ。貞観四年［630］四月に至るまで、『宝星陀羅尼経』[2]〈十巻、方等〉を訳し、後に又、『大乗荘厳論経』[3]等を訳す。七年［633］四月六日、勝光寺に卒す。春秋六十有九なり〈『開元録』八[4]、『貞元録』十一[5]、『続高僧伝』三[6]〉。

『宝星陀羅尼経』は『大集』「宝幢分」[7]の異訳にして、粗ぼ相似せり。

2、智通の受法と訳経

①千手観音の画像

武徳［618~629］中に、中天竺の婆羅門僧瞿多提婆〈Kūṭadeva〉、千眼千臂観音の形質を細氎上に図画し、副うるに結壇・手印の経本を以てし、京に至て進献す。高祖［618~626］、見れども、而も珍とせず。提婆、悒怏にして轡を旋す。

貞観［627~649］年中に至て、復た北天竺の僧あり。『千眼千臂観世音陀羅尼神呪経』[8]〈二巻〉の梵本を賫し、奉進す。太宗［626~649］、乃ち大総持寺の沙門智通に勅して、梵僧と共に、呪経、并に手印を翻出せしむ。

又、西来の梵僧あり。一の経夾を持し、以て智通に示す。之を見るに、旧本と殊にせず、唯、身呪一首を欠くのみ。

又、北天竺の婆羅門僧あり。僧伽施〈Saṃghadatta〉と名く。常に此の法を持し、

結壇・手印、朝夕に虔祈す。常州［江蘇省常州市］の正勤寺主慧琳、清信士李太一の博く梵書を学するを以て、僧伽施に諮詢し、共に之を訳さしむ。是に於て身呪、始めて具す。

又、仏授記寺に烏仗那国［Udyāna］の婆羅門僧達磨戦陀〈Dharmacanda〉あり。陀羅尼の呪句に明らかなり。常に制を奉けて、翻訳に従事す。妙甄上に於て千臂菩薩像を画き、本経の呪を并せて進献す。高宗［649~683］、宮女をして、之を繡成せしめ、或は匠人をして、之を画かしめ、以て天下に流布し、其の霊姿を墜さず〈『経序』[9]〉。沙門波崙の『経序』を製するは、則ち以て図像の漸く時に重なるを見ると知るべし。

智通とは、陝州安邑［山西省運城市］の人なり。隋の大業［605~619］中に出家受具し、総持門に於て尤も意を留む。夙に遊方の志あり。因て洛京の翻経館に往き、梵書の語を学ぶ。太宗、勅して翻経館の綴文・筆受・証義等に充てしむ。永徽四年［653］、又、『千転陀羅尼観世音菩薩呪』[10]・『観自在菩薩随心呪経』[11]・『清浄観世音普賢陀羅尼経』[12]〈各一巻、『宋高僧伝』三[13]、『開元録』八[14]〉を出す。

②千手観音法

『千眼千臂観世音神呪経』、即ち千手観音法の初出なり。大身呪[15]・二十五印呪〈惣摂身[16]、総持陀羅尼[17]、解脱禅定[18]、千眼[19]、千臂総摂[20]、通達三昧成[21]、呼召天龍八部神鬼集会[22]、呼召大梵天王及憍尸迦来問法[23]、観喜摩尼随意明珠[24]、乞願随心[25]、入滅尽定三昧[26]、請仏三昧[27]、辯才無礙[28]、破大千世界滅罪[29]、降伏三千世界魔怨[30]、広大無畏[31]、護持千眼[32]、成就[33]、成等正覚[34]、呼召三十三天[35]、呼召天龍八部鬼神[36]、解脱[37]、自在神足[38]、神変自在[39]、心王[40]〉・曼荼羅壇法[41]・水曼荼羅法[42]・画像法[43]、及び焼火・択地等の事を説く。壇を指して曼荼羅と謂うは、是を以て古とす。其の曼荼羅壇、白檀末を以て之を塗り、五色粉を以て界を模し、四門に四天王、并に其の眷属の像を安じ、壇の中心に千眼千臂観音像を安ず。呪師、東に向て、印を結び、呪を誦し、諸神を請召し、火を焼く。臂に繫くに五色線を以てし、以て種種の成就法を行ず。

③千手観音像法

画像、白氎を以て之を作る。菩薩の身、金色にして、面に三眼あり。千臂の掌中に、各の一眼あり。頭に宝冠を著け、身に瓔珞を垂る。或は両臂に作るも亦、得。経中〈巻二〉に云く、「婆羅門国に別に択地の方法あり」[44] と。惟うに、後出の『梵天択地法』の如きは、当時、已に存せりと。

④三曼荼羅

又、云く、「未だ三曼荼羅を経ざれば、必ず此の法門呪印を見ることを得ず。人をして罪を得せしむ」[45] と。

⑤都会曼荼羅

又、云く、「曽て大都会三曼荼羅金剛大道場に入らば、曼荼羅を作るを須いず。唯、須く印を結び、呪を誦すべし。願として果たさざることなく、速かに当に成仏すべし」[46] と。

⑥秘密

秘密教の秘密教たる所以、実に玆に在りと存す。即ち其の印呪法を秘惜し、門に入りて資と為るにあらざれば、則ち容易に諸を人に授けざるのみ。

⑦金剛大道場

所謂、大都会三曼荼羅金剛大道場とは、即ち『陀羅尼集経』[47] の説く所の普集会壇にあらずして、何ぞや。『集経』の原本の名、『金剛大道場経』と云う。其の已に北周［557~581］の時に成ること、前に説く所の如し。其の曼荼羅を金剛大道場と為ること、固より言を待たず。

⑧雑密の教法

是に由て之を観るに、先づ大曼荼羅法に依て灌頂を受け、始めて秘密教徒と為り、而る後に種種の諸尊の印呪法を受く。其の教法の組織、当時、既に印度に成る。顧みるに、晋・宋の際［420］の孔雀等の経の初出、密呪法の始

興より以来、造壇・焼火・結印・画像等の諸事相、漸く備わりて、次第に発達し、茲に至るまで、後の所謂、雑密の教法、乃ち殆ど完成す。

⑨成仏の願

而るに其の法の主とする所、専ら世間の諸願成就の功に在りと雖も、『千臂経』[48] に至らば、則ち速得成仏を以て所願の極致と為る。即ち願意も亦、発達して、出世間の義を兼ぬるに至る。経中に成等正覚印呪ありて、以て滅罪・除障・得道法と為る[49] は、乃ち之が為なるのみ。其の由来する所、元、大乗心地陀羅尼門に在りて、呪法、向上するも、復た、之を説くを忘れず。是れ、密教の幸いに外道と為り了らざる所以なり。雑密も亦、何ぞ貶するを得んや。

⑩突迦の一名の千手

千臂の梵言の娑賀娑羅歩惹［sahasrabhuja］、即ち突迦女天の一名なり。知るべし、此の変化観音も亦、湿縛の鑠乞底［śakti］より出づ。千眼の梵言の娑賀娑羅儜帝隷［sahasranetra］、又は娑賀娑囉乞灑［sahasrākṣa］、蓋し諸を帝釈の異名に取るのみ[50]。

⑪新作経

唐初の竺僧、頻りに千手法を伝う。想うに其の経、新成して、流伝、未だ洽からず。乃ち応に支那に珍重せらるべしと謂いて、然らんか。夫れ、歴代の伝訳経の増広、必ず新たにして、皆、前経に同じからず。蓋し支那の翻経宣法の盛んなるを聞きて、特に之を齎し来るは、其の意、或は亦、是の如くなるのみ。

⑫千転呪法

『千転観音呪』[51] とは、『種種雑呪経』の千転呪[52] を以て、基本とし、附するに成就壇法[53]・焼火法[54] を以てす。其の壇、四重にして、四方に門を開き、正中の一重に門を設けず、飲食・灯明を供列す。箭を挿し、之を五綵線に繫ぐ。

⑬木釘

又、佉陀羅木［khadira］を用いて、壇の四角に釘す。此の木釘、即ち後の所謂、金剛橛［vajrakīlaka］なり。又、白色観音聖者像を造ることを説く[55]。経中に千転、及び観世音心の二印あり[56]。即ち闍那崛多の先に出す所なり〈経末の記[57]〉。

⑭観音随心呪法

『随心呪経』[58]、又、『多利心経』と名く[59]。即ち『陀羅尼雑集』中の随心所願陀羅尼[60]、及び『種種雑呪経』中の四首の随心呪[61]の増広するものと為る。其の五十印〈随心（身、又は都印呪）[62]、奉請[63]、華台[64]、香華[65]、香水[66]、護身[67]、心[68]、口[69]、大懺悔[70]、召喚一切大力鬼神天龍八部[71]、大結界辟毘那夜迦[72]、随心[73]、為度魔王波旬入道匈慕[74]、降伏外道六師[75]、救見六道衆生令離苦解脱[76]、施甘露[77]、防離[78]、自在[79]、三昧[80]、喚閻羅王[81]、喚召四天王[82]、持戒[83]、隠身隠形入六道[84]、喚召五通等仙人[85]、灌頂清浄[86]、水難[87]、火難[88]、風難[89]、天難[90]、地難[91]、賊難[92]、王難[93]、施無畏[94]、防毒難[95]、求聡明[96]、破地獄[97]、求生浄土[98]、救一切病苦衆生[99]、取地中伏蔵[100]、求見観世音菩薩[101]、求見仏[102]、随心成就満足六波羅蜜[103]、随心具足一切功徳[104]、随心神足[105]、随心祈願[106]、祈一切願[107]、随心解一切神鬼金剛等法[108]、随心陀羅尼[109]、総摂[110]〉、大抵、皆、呪あり。諸を先の『牟梨曼陀羅経』[111]に比さば、互いに出入あり。行法の支分の次序、変化の一ならざるを見る。水壇に諸の幡蓋を懸け、種種に荘厳し、随心観音像を安ず[112]。然れども像法を説かず。故に随心とは、呪名に止まり、遂に分化し、以て一尊と成るに至らず。後世に復た随心観音なるものあることなし。成就法中に結縷・呪土・呪水等[113]を説く。

⑮三曼荼羅会

此の経も亦、云く、「未だ三曼荼羅の大法壇に入ることを経ざれば、慎みて見せしむることなかれ」[114]と。其の秘密の意、乃ち『千臂経』[115]に同じ。凡そ翻経年代の相近ければ、其の法も亦、相類し、畢竟じて、原本述作の時を同じと為るのみ。経中の一印、智通、之を玄奘に受く[116]。又、経末の記を

按ずるに、中天竺国の長年の跋吒那羅延〈Bhaṭṭanārāyaṇa〉、罽賓国の沙門の喝囉那僧伽〈Raṇasaṃgha〉と三曼荼羅会に同りて、此の法を受持す。後に勅に因て召かれて、京に入る。智通、乃ち壇を作り、法の如く之を受け、以て此の経を訳す[117]。

⑯支那の造壇受法の権輿

是に先んじて尸梨蜜多羅［Śrīmitra, ?~342］、孔雀呪法を伝うと雖も、其の式、明らかならず。曼荼羅・印契の発達の後、支那の造壇受法、蓋し是を以て権輿とす。此の二梵僧、及び先の瞿多提婆・僧伽施・達磨戦陀等、当時の入唐の天竺沙門、已に都会三曼荼羅灌頂を受くる者、少なからず。是の如くの事、楊隋［581~619］以前に未だ曽て之あるを聞かず。蓋し金剛大道場経、斉［550~577］・周［557~581］の際に成り、隋代を経て、唐［618~907］初に至り、其の法、漸く印度に行われ、始めて三曼荼羅灌頂ありて、以て支那に伝うること、復た疑を容れず。

⑰随心呪の又の法

『随心呪経』に別本あり。亦、智通の出す所なり。題して『観自在菩薩怛嚩多唎随心陀羅尼経』〈一巻〉と云う[118]。大都、相同じと雖も、更に一壇法を説く。壇の中心に東に向て観音像を安じ、四方に四天王の座を置き、灯旛等を荘厳す。皆、図を出して之を示す[119]。

⑱呪師、西を向く

本尊、東に向い、呪師、西北に向うは、前出の諸経に同じからず。是れ、一の異法と為る。後来の金剛界曼荼羅の方位、乃ち独り之に依る。

⑲水天像法

又、水天像法を説く[120]。天女形の似く、面に三眼あり。天冠・天衣・瓔珞を著け、両手に如意宝珠を捧ぐ。水天［Varuṇa］は、吠陀［Veda］の諸天の一なり。初めは、則ち虚空神、後に河海神と為り、人間の命運を司り、又、能

く病を治す。其の執る所の羂索、以て悪人を縛す。補羅拏［purāṇa］に至らば、則ち降りて西方の守護神と為る[121]。是も亦、外道より仏教に入る。

⑳本尊観と字輪観

此の経の特色の最も著しきは、其の始めに本尊観・字輪観を説くに在り。云く、「其の座の前に於て、当に大蓮華ありと観ずべし。華の上に覩龍〈二合〉字あると想え。其の字、変じて青蓮華と成る。乃至、変じて多利菩薩［Tārā］と成り、種種に荘厳す。宝冠の上に観自在王如来あり。左に青蓮華を持して、心上に当て、右は施諸願無畏なり。念誦の時、応に是くの如く観ずべし。其の本尊の真言の字、浄月の中に於て右旋すること髻の如し。猶、水精の珠の列なりて明鏡に在り、光、表裏を徹して分明なるがごとし」[122]と。顧みるに従前の諸経、本尊の現身を説くは、皆、以て誦呪の功力の致す所とす。茲に至て、始めて本尊を行者の観想の裡に現出す。

㉑種子

其の覩龍［troṃ］字、即ち所謂、種子なり。種子とは、是に於て始めてあり。是より以後、諸尊に、皆、種子あるに至り、遂に之を以て字曼荼羅を作る。蓋し陀羅尼門の字義より転化し、以て之を生ず。故に多く尊名の首字を取り、或は呪中の主語の一字を取る。然らざるもの、間、意を其の尊の本誓に取る。種子の梵言の毘惹〈Bīja, vīja〉、婆羅門教、夙に之を用う。仏教、乃ち亦、之に仿う。只、見る、密教の益す発達して、其の事相の諸支の益す完備に近づくを。

㉒観法の発達

蓋し『般舟三昧』[123]・『観仏三昧』[124]、乃至、爾余の観仏菩薩の諸経の説く所の観法、向上進化し、以て茲に至る。更に婆羅門教瑜伽派の観法と互相に影響し、以て遂に大日経宗の五輪観、及び金剛頂宗の五相成身観と成る。此の経の観法、則ち正に其の過程の半途に在り。

㉓密教の枢機

大凡、顕教の観法、小乗は専ら四諦・十二因縁等を観じ、大乗は、或は空を観じ、或は理を観じ、或は心を観ず。故に其の仏菩薩観の外に、所観、率ね形相なし。天台の止観、少林の坐禅、蓋し皆、然りとす。密教の観法は、則ち然らず。之を観ずるに法あり、所観に相あり。塗香・灑水・誦呪・結印、種種の所作、即ち止法の方便と為り、月輪内の種子、変じて三摩耶形と成る。三摩耶形、変じて本尊と成り、以て本尊と己身と渉入するに至り、悉く皆、其の則あり。是を以て諸観、成じ易く、道場観よりして諸尊観に至るまで、変化無量なり。其の本誓に従い、功用も亦、無辺なり。而も観中の境界は、素より時間を撥無し、空間を超越し、無声を聴き、無形を視る。故に其の玄枢の妙機に達さば、則ち能く不可思議の義を現ずるを得ること、輓近の心理論者の所謂、精神統一法の如し。只、是れ、観海涓滴なるのみ。密教の真価、実に観法に在りて存す。若し観法者微かりせば、則ち有相の事密、悉く是れ、形骸なるのみ、糟粕なるのみ。其の宗教と為るに於て、復た何の益のあらんや。

㉔外道の字輪曼荼羅

字輪観は、亦、密教不共の法にあらず。烏波尼沙土［Upaniṣad］、夙に字輪曼荼羅あり。其の大輪曼荼羅〈Mahācakra-maṇḍala〉、唵字［oṃ］を中心に置き、重輪を設け、周匝に六字・八字・十二字・十六字・三十二字等の呪を書く〈Nṛsiṃha-pūrva-tāpanīya Upaniṣad〉。善見大輪曼荼羅〈Sudarśana-mahācakra-maṇḍala〉、中心に羅摩〈Rāma〉を画き、周匝に蓮華を作る。八葉・十二葉・十六葉・三十二葉にして、各の呪字を書く〈六字呪 Oṃ namaś cakrāya, 八字呪 Oṃ namo Nārāyanāya, 十二字呪 Oṃ namo bhagavate Vāsudevāya, 十六字呪 a ā i ī u ū ṛ ṝ ḷ ḹ e ai o au ṃ ḥ, 三十二字呪 Ugram Vīraṃ Mahāviṣṇu Jvalantaṃ sarvato mukhaṃ Nṛsiṃhaṃ bhīṣaṇaṃ bhadraṃ mṛtyumṛtyuṃ namāmyaham〉。又、字母曼荼羅〈Mātrikamaṇḍala〉あり。諸神の種子を書く〈Nṛsiṃha-uttara-tāpanīya Upaniṣad〉。密教の中に字輪あるは、豈に婆羅門教と関係なしと謂うを得んや。

㉕清浄観音法

『清浄観世音普賢陀羅尼経』[125]、普賢[126]・奉請[127]・結界[128]の三呪、及び其の功力を説くと雖も、一も印を説かず。四仏の名[129]、『観仏三昧海経』[130]に同じくして、未だ曼荼羅に入らず。画像法、先づ釈尊〈華座に坐し、身、金色にして、五彩衣を著く。右手に印文を作し、左手に袈裟を捉え、膝に按ず〉を画き、左に普賢菩薩〈両手に経夾を執り、五色の衣を著く。須弥山に坐し、七頭・五頭の二龍、山を繞る〉を画き、右に観音〈華座に坐し、白衣を著け、胡跪合掌して仏に向く。其の手、六にして、左の三手に華・澡缶・経夾を執り、右の三手は施無畏にして宝を出し、索を把り、珠を持す。頂上に仏あり〉を画き、下に行者〈珠を把り、胡跪して、香を焼く〉を画く。普賢の下に毘陀天女〈白衣を著け、菩薩に向て、跪座して、華冠を捧ぐ〉を作す。仏壇、種種に荘厳し、其の前に更に焼火壇を作る[131]。

㉖六臂観音

後世、此の経を以て、多く普賢法の所依と為ると雖も、啻に其の呪法、皆、観音の説く所なるのみならず、画像法中の六臂観音、即ち不空羂索にして、亦、是れ、変化観音の一法なり。

㉗毘陀天女

毘陀、蓋し毘地耶［vidyā］、即ち明呪にして、明呪天女とは、乃ち突迦［Durgā］を謂うか、或は毘拏〈Vīṇā〉の訛にして、突迦の眷属の瑜祇尼〈Yoginī〉の名より出るか。更に考うべし。

3、伽梵達摩の訳経

①千手法

伽梵達摩［Bhagavaddharma, ~655~］〈尊法〉、西印度の人なり。遠く沙磧を踰えて震旦に至り、『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』[132]〈一巻〉を訳す。其の年代、詳かならずして、『開元』[133]〈巻九〉・『貞元』[134]〈巻十二〉の二録、共に諸を智通の後に附す。蓋し永徽中［650~655］なり〈『宋高僧伝』二[135]、『六学僧伝』二[136]〉。

此の経も亦、唯、大悲心呪一首を出す[137]のみにして、印を説かず。其の結界壇法、智通訳の『千臂経』等に比して、頗る簡略と為る。

②四十臂の持物

然り而して、其の千眼大悲心像、面を西方に向け、四十手の持物の目〈如意珠、羂索、宝鉢、宝剣、跋折羅、金剛杵、施無畏、日精珠、月精珠、宝弓、宝箭、楊枝、白払、胡瓶、旁牌、斧鉞、玉環、白蓮華、青蓮華、宝鏡、紫蓮華、宝篋、軍遅、紅蓮華、宝戟、宝螺、髑髏杖、数珠、宝鐸、宝印、倶尸鉄鉤、錫杖、合掌、化仏、化宮殿、宝経、金輪、頂上化仏、蒲萄なり[138]。後出の経、多少の相違ありと雖も、率ね皆、之に同じ〉、初めて此の経に出づ。其の像法の益す精しきを見るべし。又、誦呪の功力に依て、十五種の善生を得ると説く[139]。乃ち千手観音の一異法にして、頗る後世に行わる。

③千手薬法

『千手千眼観世音菩薩治病合薬経』[140]〈一巻〉も亦、伽梵達摩の訳す所と称す。然れども、経録、之を載せざること、疑うべし。且つ前経中の成就法と大同小異にして、印呪を出さず。想うに、是れ、則ち抄録の異本か。

4、那提の訳経

那提［~655~663~］〈具に布如烏代耶［Puṇyodaya］と云う。福生なり〉、中印度の人なり。年少くして出家し、深く実相を解し、善く方便に達す。外道の四韋陀［Veda］、洞通せざるなし。諸国を歴遊し、声明の詁訓を博綜す。大夏［Bactria, Tokhara］、請いて文士と為らしむ。既にして、師子国［Siṃhala, Sri Lanka］・南海の諸国に遊び、縁に随て遊化す。脂那の仏法の崇盛なるを聞き、乃ち大小乗の経律論五百余夾千五百余部を捜集して、永徽六年［655］、長安に達し、勅して慈恩寺に安置せしむ。時に玄奘［602~664］の途に当り、翻訳、声華騰蔚にして、那提の力を致すに由なし。顕慶元年［656］、勅を奉て、薬を昆崙の諸国に採る。南海の諸王、之に帰敬し、為に別に寺を立て、人を度して、法を授く。龍朔三年［663］十月、慈恩寺に還り、則ち先に賚す所の

梵本、多く玄奘の将出する所と為る。故に、其の年、唯、『師子荘厳王菩薩請問経』[141]〈亦、『八曼荼羅経』と名く〉・『離垢慧菩薩所問礼仏法経』[142]〈各一巻、並に方等〉・『阿吒那智呪経』〈一巻、佚〉等を訳す。之を頃くして、真臘国［Chenla, Canbodia］の受化者の請に依り、再び旨を奉て、薬を採ると称して南遊し、終る所を知らず〈『貞元録』十一[143]、『経序』[144]〉。

①八大菩薩の曼荼羅

『荘厳王問経』、明呪なしと雖も、曼荼羅を説く。則ち方壇の上に八円壇を作り、八菩薩〈観音、弥勒、虚空蔵、普賢、執金剛主、文殊、止諸障、地蔵〉を供養す[145]。即ち八大菩薩曼荼羅法の嚆矢と為る。顧みるに、此の法、夙に『無量門』[146]・『八吉祥』[147]等の経に萌し、『大陀羅尼神呪経』[148]に至て、八尊、始めて各のに呪あり。茲に至て、遂に一部の法と成る。密教発達の状、亦、其の一端を是に考察するに足る。

②五仏礼拝

『離垢慧問経』、五輪を作て、東方の阿閦・南方の宝相・西方の無量寿・北方の妙鼓声〈四維にも亦、各の仏あり〉・上方の智光・下方の毘盧遮那、及び娑訶世界の本師釈迦如来を礼拝する法を説く[149]。乃ち後日の両部大曼荼羅の大日を本尊とし、四仏を四方に列するは、其れ茲を根原とすと見るべし。

5、西域南蛮の外道諸神の崇拝

貞観三年［629］八月、沙門玄奘、長安を首塗し、五天を周歴して、大いに経像を賫す。十九年［645］正月二十四日、還りて京師に至る〈『慈恩伝』一・六[150]、『続高僧伝』四[151]〉。二十年［646］七月、『大唐西域記』[152]〈十二巻、『開元録』八[153]〉を撰し、其の見聞する所を録す。蓋し当時の五印度、外道の隆興の仏教に過ぐるものあり。窣祿勤那［Srughna, Sugh］・秣底補羅［Matipura, Mandawar］・室羅伐悉底［Śrāvastī］・摩醯濕伐羅補羅［Maheśvarapura, Gwalior or Mandla］〈中天〉・婆羅吸摩補羅［Brahmapura, Garhwal?］〈北天〉・恭御陀［Koṅgoda, Ganjam］〈東天〉・羯餒伽［Kaliṅga, Bhubaneswar］・秣

羅矩吒［Malakūṭa, Malabar］・擲枳陀［Chikdha, Chittorgarh?］〈南天〉・茂羅三部盧［Mūlasthānapura, Multan］〈西天〉等の諸国、尽く仏法を排して、天神に敬事す。僧侶少なく、外道多し。秣羅矩吒国の如きは、伽藍、荒蕪して、僅かに余址を存すのみ。葱嶺［Pamir］の左右の諸国も亦、往往に外道を崇信す。活国［Kunduz］の如きは、多く三宝を信ずと雖も、少しく諸神に事う。漕矩吒国［Jāguḍa, Zabulistan］、外道、極めて盛んなり。颯秣建国［Maracanda, Samarkand］、事火を以て道とす。突厥［Türk］の葉護可汗［Yabghu Qaghan, 618?~628］も亦、専ら火に事う〈此の二国の事、『慈恩伝』二[154]に出づ〉。南蛮の真臘国、仏道、及び天神を尚び、天神を大とし、仏道、之に次ぐ〈此の事、『旧唐書』百九十七南蛮列伝に出づ[155]〉。

①天祠

是を以て、諸国に皆、天祠あり。少なきは、数十を下らず、其の最多なるは、薩他泥湿伐羅［Sthāneśvara, Thanesar］・窣祿勤那・羯若鞠闍［Kanyakubja, Kaunaj］・鉢羅耶伽［Prayāga, Allahabad］・室羅伐悉底・婆羅痆斯［Vārāṇasī, Varanasi］・奔那伐弾那［Puṇḍravardhana, Mahasthangarh］〈中天〉・迦摩縷波［Kāmarūpa, Guwahati］・三摩怛吒［Samataṭa, Bengal］〈東天〉・羯餒伽・馱那羯磔迦［Dhānyakaṭaka, Dharanikota］・秣羅矩吒・恭建那補羅［Koṅkaṇapura, Konkan］・摩訶剌侘［Mahārāṣṭra, Paithan］・摩臘婆［Mālava, Gujarat］・伐臘毘［Valabhī, Vallabhi］〈南天〉・蘇剌佗［Surāṣṭra, Surat］・狼揭羅［Laṅgala, Makran］〈西天〉の諸国の如きは、各の百余、乃至数百所あり。異道、雑居して、或は断髪し、或は椎髻し、髑髏を連ねて冠鬘とし、露形して服なく、身に塗るに灰を以てし、皆、大自在天［Maheśvara］に事えて、精勤苦行し、生死を出るを求む。

②大自在天祠

大自在天祠の尤なるもの、健馱邏［Gandhāra, Peshawar］・鉢伐多［Parvata, Harappa］〈北天〉・秣底補羅・羯若鞠闍・鉢羅耶伽・摩揭陀［Magadha, Patna］〈中天〉・狼揭羅の諸国に在り。祠宇、輪奐にして、彫飾、壮厳なり。天像、霊異

にして、崇奉、甚だ盛んなり。就中、羯若鞠闍の自在天祠の如きは、日天祠と共に、並に青石を瑩き、倶に彫飾を窮む。規模、度量、仏の精舎に同じ。各の千戸ありて、其の灑掃に充つ。鼓楽絃歌、昼夜を舎かず〈『西域記』五[156]〉。

③大自在天妃像

大自在天妃も亦、崇拝せらる。健馱羅国の崇山に青石の大自在天婦像あり。毘摩天女［Bhīma］なり。土俗の曰く、此の天像は自然有なりと。霊異、既に多く、祈祷も亦、衆し。印度の諸国、福を求めて願を請い、貴賤、畢く萃まり、遠近、咸く会まる。其れ、天神の形を見んと願うものありて、至誠にして弐なく、食を断つこと七日せば、或は見ることを得るあり。求願、多く遂ぐ〈『西域記』二[157]〉。

④突伽祭

阿踰陀国［Ayodhyā, Ayodhya］の群賊、突伽天神［Durgā］に事え、毎ね秋中に於て一人の質状瑞美なるを覓め、殺して肉血を取り、以てこれを祠る。玄奘、嘗て其の厄に遭い、将に殺されんとして、幸いにして免る〈『慈恩伝』三[158]〉。

⑤日天祠

日天［Āditya］崇拝も亦、盛にして、羯若鞠闍国の日天祠の壮美なること、前に述る所の如し。茂羅三部盧国も亦、「日天祠あり。荘厳、甚だ麗しくして、其の日天の像、鋳するに黄金を以てし、飾るに奇宝を以てす。霊鑑、幽に通じ、神功、潜に被る。女楽、遞に奏し、明炬、日を継ぐ。香華の供養、初めより廃絶することなし。五印度の国の諸王豪族、此に於て珍宝を捨施し、福舎［puṇyaśāla］を建立し、飲食・医薬を以て貧病を給済せざることなし。諸国の人の此に来りて願を求むること、常に千数あり。天祠の四周の池沼華林、甚だ遊賞すべし」と云う〈『西域記』十一[159]〉。玄奘、将に返らんとする時、戒日王［Śīlāditya, Harṣavardhana, ca.605~647］、無遮大会を鉢羅耶伽国に設く。其の施場の殿内に、第一日は仏像を安じ、第二日は日天像を安じ、第三日は

大自在天像を安ず〈『慈恩伝』五[160]〉。

⑥那羅延天祠

那羅延天［Nārāyaṇa］・婆藪天［Vasudeva］等も亦、敬事せらる。戦主国［Garjapatipura, Ghazipur］の「殑伽河［Gangā］の北に那羅延天祠あり。重閣の層台、煥然[161]と麗飾し、諸天の像、石を鐫りて成ず。工、人謀を極め、霊応、究め難し」〈『西域記』七[162]〉。伝て謂く、昔、摩臘婆国に大憍[163]の婆羅門あり。「毎に自ら言て曰く、吾れ、出世の為に[164]、聖を述べ、凡を導く。先哲後賢[165]、我と比するなし。彼の大自在天・婆藪天・那羅延天・仏世尊は、人、皆な風靡して、其の道を祖述し、形を図きて、競て祇敬を修せざるなし。我れ今、徳、彼を踰え、名、時を擅にす。異なる所あらざれば、其れ、何を以て顕さんと。遂に赤栴檀を用いて、大自在天・婆藪天・那羅延天・仏世尊等の像を刻作して、座の四足とし、凡そ至る所あらば、負せて以て自らに随わしむ」〈『西域記』十一[166]〉。以て当時の諸神中に最も敬仰せらる者を知るに足る。

⑦婆藪天

婆藪天〈Vasudeva〉は、或いは阿邇底也〈Āditya〉・摩魯多〈Maruts〉・阿湿頻〈Aśvins〉・天帝釈〈Indra〉・烏灑娑〈Uṣas〉・魯拏羅〈Rudra〉・風天〈Vāyu〉・毘紐〈Viṣṇu〉・溼縛〈Śiva〉・倶毘羅〈Kubera〉の諸神の通称とす[167]。或は云く、訖栗瑟拏［Kṛṣṇa］の父、其の名を婆藪天と云うと。又、訖栗瑟拏の一名、即ち婆藪天なりとす[168]。今、其の指す所を何と為るか詳かならず。

⑧五天神

又、泥婆羅国［Nepāla, Nepal］、五天神に事う。石を鐫て像と為し、毎日、清水を以て之に浴し、羊を烹て以て祭る（『旧唐書』百九十八[169]、『新唐書』二百二十一[170]）。羯朱嗢祇羅国［Kajaṅgala, Rajmahal］〈中天〉に高台あり。甎石を壘ねて以て建つ。基址、広く峙し、刻彫、奇く製す。台の方面を周り、衆の聖像を鏤み、仏、及び天の形、区別して之を作る〈『西域記』十[171]〉。

⑨穌那天

印度境外の諸国も亦、往往に外道の神を奉る。漕矩吒国、穌〈錫苟反〉那天〈Śoṇadeva〉[172]を宗事す。其の天神、昔、迦畢試［Kāpiśī, Kapisa］国の阿路猱［Aruṇa］山[173]より徙り、此の国の南界の穌那呬羅［Śunāśilā］山[174]中に居し、威を作し、福を作し、暴を為し、悪を為す。信求せば願を遂げ、軽蔑せば殃を招く。故に遠近宗仰し、上下祗懼す。鄰国の異俗の君臣僚庶、毎歳の嘉辰に期せずして会し、或は金銀奇宝を齎し、或は牛馬馴畜を以てして、競て貢奉を興し、俱に誠素を申ぶ。所以に金銀、地に布き、羊馬、谷に満つとも、敢て覬覦することなく、唯、施奉を修すのみ。外道に宗事して、克心に苦行せば、天神、其の呪術を授く。遵行せば多効ありて、疾病を治療し、頗る痊愈を蒙る〈『西域記』十一[175]〉。

穌那天とは河神なり。其の河、阿摩羅乾吒迦山〈Amarakaṇṭhaka〉より流出す[176]。此の神、烏摩［Umā］に恋する話説あり。旧、頻陀［Vindhya］山地に行わる。

其の余の奔那伐禅那・吠舎釐［Vaiṣālī］〈中天〉・三摩怛吒〈東天〉・羯篏伽［Kaliṅga］・珠利耶［Chola］・秣羅矩吒〈南天〉などの諸国、尼乾露形［Nirgrantha］の徒、少なからず。

注

1）拙著「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（一）」（『大正大学研究紀要』98, 大正大学, 2013）、「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（二）」（『大正大学研究紀要』99, 大正大学, 2014）、「鉄塔相承説をめぐって―大村西崖著『密教発達志』訳注研究（三）―」（小澤憲珠名誉教授頌寿記念論集『大乗仏教と浄土教』, ノンブル社, 2015）、「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（四）」（『大正大学研究紀要』100, 大正大学, 2015）、「密教の発生をめぐって―大村西崖著『密教発達志』訳注研究（五）―」（小峰彌彦先生・小山典勇先生古稀記念『転法輪の歩み』（『智山学報』65, 智山勧学会, 2016）、「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（六）」（『智山学報』70, 智山勧学会, 2021）、「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（七）」（『川崎大師教学研究所紀要』7, 川崎大師教学研究所, 2022）、「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（八）」（『川崎大師教学研究所紀要』8, 川崎

大師教学研究所，2023)、「大村西崖著『密教発達志』訳注研究（九）」(『川崎大師教学研究所紀要』9，川崎大師教学研究所，2024)

2)『宝星陀羅尼経』(T. vol.13, No.402)

3)『大乗荘厳論経』ではなく、『大乗荘厳経論』(T. vol.31, No.1604)

4) 智昇『開元釈教録』(T. vol.55, No.2154, pp.553b~554a)

5) 円照『貞元新定釈教目録』(T. vol.55, No.2157, pp.852c~853b)

6) 道宣『続高僧伝』(T. vol.50, No.2060, pp.439c~440c)

7)『大方等大集経』「宝幢分」(T. vol.13, No.397-9)

8)『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』(T. vol.20, No.1057)

9)『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経序』(T. vol.20, No.1057, p.83b~c)

10)『千転陀羅尼観世音菩薩呪』(T. vol.20, No.1035)

11)『観自在菩薩随心呪経』(T. vol.20, No.1103a)

12)『清浄観世音普賢陀羅尼経』(T. vol.20, No.1038)

13) 賛寧等『宋高僧伝』(T. vol.50, No.2061, pp.719c~720a)

14) 智昇『開元釈教録』(T. vol.55, No.2154, p.562b)

15)『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』(T. vol.20, No.1057, p.84a~c)

16) 同上（p.85b）

17) 同上（p.85b）

18) 同上（p.85b~c）

19) 同上（p.85c）

20) 同上（p.85c）

21) 同上（p.85c）

22) 同上（pp.85c~86a）

23) 同上（p.86a）

24) 同上（p.86a）

25) 同上（p.86a）

26) 同上（p.86a~b）

27) 同上（p.86b）

28) 同上（pp.87c~88a）

29) 同上（p.88a）

30) 同上（p.88a~b）

31) 同上（p.88b）

32) 同上（p.88b~c）

33）同上（p.88c）
34）同上（p.88c）
35）同上（pp.88c~89a）
36）同上（p.89a）
37）同上（p.89a~b）
38）同上（p.89b）
39）同上（p.89b）
40）同上（p.89b）
41）同上（p.86b~c）
42）同上（pp.86c~87a）
43）同上（p.87b）
44）同上（p.86b）
45）同上（p.85c）
46）同上（p.87a）
47）『陀羅尼集経』（T. vol.18, No.901）
48）『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』（T. vol.20, No.1057）
49）同上「此与滅尽印法同過去未来現在諸仏皆同此印得仏菩提此印能除一切業障」（p.88c）
50）Monier-Williams “A Sanskrit English Dictionary” によれば、“sahasranetra” も、“sahasrākṣa” も、どちらも “Mahābhārata” などを典拠に、“N. of Indra” といい、帝釈の異名としている（p.1195c, 1196b）
51）『千転陀羅尼観世音菩薩呪』（T. vol.20, No.1035）
52）『種種雑呪経』「千転陀羅尼」（T. vol.21, No.1337, p.639a~b）
53）『千転陀羅尼観世音菩薩呪』（T. vol.20, No.1035, p.18a）
54）同上（p.18b）
55）同上「須画一白色観音聖者像」（p.18a）
56）同上（p.17c）
57）同上「其印法者崛多師訳出」（p.18b）
58）『観自在菩薩随心呪経』（T. vol.20, No.1103a）
59）同上「亦名多唎心経」（p.457a）
60）『陀羅尼雑集』「観世音説随心所願陀羅尼」（T. vol.21, No.1336, pp.615c~616a）
61）『種種雑呪経』「観世音随心呪四首」（T. vol.21, No.1337, p.639b~c）
62）『観自在菩薩随心呪経』「随心印呪第一〈亦名身印呪亦名都印呪〉」（T. vol.20,

No.1103a, p.457c）

63）同上「奉請呪第二〈用身印誦此呪〉」（p.457c）

64）同上「華台印呪第四」（pp.457c~458a）、この印呪の前に「啓請印呪第三〈此一印呪通請一切菩薩〉」（p.457c）がある

65）同上「香華印呪第五」（p.458a）

66）同上「香水印呪第六」（p.458a）

67）同上「護身印呪第七」（p.458a）

68）同上「心印呪第八」（p.458a~b）

69）同上「口印呪第九」（p.458b）

70）同上「大懺悔印呪第十」（p.458b）

71）同上「召喚一切大力鬼神天龍八部印呪第十一」（p.458b）

72）同上「大結界辟毘那夜迦印呪第十二」（p.458b）

73）同上「随心印第十三」（p.458b~c）

74）同上「為度魔王波旬入道匈慕印第十四」（p.458c）

75）同上「降伏外道六師印第十五」（p.458c）

76）同上「救見六道衆生令離苦解脱印呪第十六」（p.458c）

77）同上「施甘露印第十七」（p.458c）

78）同上「防難印呪第十八」（p.458c）

79）同上「自在印呪第十九」（pp.458c~459a）

80）同上「三昧印第二十」（p.459a）

81）同上「喚閻羅王印呪第二十一」（p.459a）

82）同上「喚召四天王印呪第二十二」（p.459a）

83）同上「持戒印呪第二十三」（p.459a）

84）同上「隠身随形入六道印呪第二十四」（p.459a~b）、「隠身隠形」ではなく「隠身随形」

85）同上「喚召五通等仙人印呪第二十五」（p.459b）

86）同上「灌頂清浄印呪第二十六」（p.459b）

87）同上「水難印呪第二十七」（p.459b）

88）同上「火難印第二十八」（p.459b）

89）同上「風難印第二十九」（p.459c）

90）同上「天難印第三十」（p.459c）

91）同上「地難印呪第三十一」（p.459c）

92）同上「賊難印呪第三十二」（p.459c）

93）同上「王難印呪第三十三」（pp.459c~460a）
94）同上「施無畏印呪第三十四〈一名除怖畏印呪〉」（p.460a）
95）同上「防毒難印呪第三十五」（p.460a）
96）同上「求聡明印呪第三十六」（p.460a）
97）同上「破地獄印第三十七」（p.460b）
98）同上「求生浄土印第三十八」（p.460b）
99）同上「救一切病苦衆生印第三十九」（p.460b）
100）同上「取地中伏蔵印第四十」（p.460b）
101）同上「求見観世音菩薩印第四十一」（p.460b）
102）同上「求見仏印呪第四十二」（p.460b~c）
103）同上「随心成就満足六波羅蜜印呪第四十三」（p.460c）
104）同上「随心具足一切功徳印第四十四」（p.460c）
105）同上「随心神足印第四十五」（p.460c）
106）同上「随心祈願印第四十六〈通師用印〉」（pp.460c~461a）
107）同上「祈一切願印第四十七〈共前印同〉」（p.461a）
108）同上「随心解一切神鬼金剛等法印第四十八」（p.461a）
109）同上「観世音菩薩随心母陀羅尼印第四十九」（p.461a~b）
110）同上「総摂印呪第五十」（p.461b）
111）『牟梨曼陀羅呪経』（T. vol.19, No.1007）
112）『観自在菩薩随心呪経』（T. vol.20, No.1103a, p.461a）
113）同上（p.461c）
114）同上（p.461a）
115）『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』（T. vol.20, No.1057）
116）『観自在菩薩随心呪経』（T. vol.20, No.1103a, p.463a）
117）同上（p.463a）
118）『観自在菩薩怛嚩多唎随心陀羅尼経』（T. vol.20, No.1103b）
119）同上（p.469b）
120）同上「即説随心造水天像法以白檀木刻作其像身高五寸似天女形面有三眼頭著天冠身著天衣瓔珞荘厳以両手捧如意宝珠身高二寸半」（p.469b）によるが、「水天」の註で「甲本傍註曰水天二字未審」となっている
121）Monier によれば、「虚空神」に関しては “All-enveloping Sky, N. of Āditya” として、Āditya の名前としており、“and is commonly thought to correspond to the O□ρανός of the Greeks” といってギリシャの天空神のウーラノス

に関連づけており（p.921b）、ādityaの項では“N. of seven deities of the heavenly sphere”といい、Varuṇaがその首領であるとする（p.137b）

122）『観自在菩薩怛嚩多唎随心陀羅尼経』（T. vol.20, No.1103b, p.463c）

123）『仏説般舟三昧経』（T. vol.13, No.417）、『般舟三昧経』（T. vol.13, No.418）

124）『仏説観仏三昧海経』（T. vol.15, No.643）

125）『清浄観世音普賢陀羅尼経』（T. vol.20, No.1038）

126）同上「普賢陀羅尼」（pp.21b~22a）

127）同上「奉請陀羅尼」（p.22a）

128）同上「結界陀羅尼」（p.22a）

129）同上「東方阿閦鞞仏南方宝相仏西方阿弥陀仏北方微妙声仏」（p.22b）

130）『仏説観仏三昧海経』「東方阿閦南方宝相西方無量寿北方微妙声」（T. vol.15, No.643, p.688c）

131）『清浄観世音普賢陀羅尼経』（T. vol.20, No.1038, pp.22c~23a）

132）『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』（T. vol.20, No.1060）

133）智昇『開元釈教録』巻八（T. vol.55, No.2154, p.562b~c）

134）円照『貞元新定釈教目録』巻十二（T. vol.55, No.2157, p.862c）

135）賛寧等『宋高僧伝』巻二（T. vol.50, No.2061, p.718b）

136）曇噩『新脩科分六学僧伝』巻二（卍続x, vol.77, No.1522, p.83c）

137）『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』「広大円満無礙大悲心大陀羅尼神妙章句陀羅尼」（T. vol.20, No.1060, p.107b~c）

138）同上（p.111a~b）、「日精珠、月精珠」は、それぞれ「日精摩尼」「月精摩尼」に、「青蓮華」は「清蓮華」になっており、「宝篋」の後の「五色雲」が欠けており、「金輪」は「不退金輪」となっている

139）同上「若諸人天誦持大悲心呪者得十五種善生不受十五種悪死也」（p.107a~b）

140）『千手千眼観世音菩薩治病合薬経』（T. vol.20, No.1059）

141）『師子荘厳王菩薩請問経』（T. vol.14, No.486）

142）『離垢慧菩薩所問礼仏法経』（T. vol.14, No.487）

143）円照『貞元新定釈教目録』巻十二（T. vol.55, No.2157, p.863a~c）

144）道宣『師子荘厳王菩薩請問経序』（T. vol.14, No.486, p.697b）、道宣『離垢慧菩薩所問礼仏法経序』（T. vol.14, No.487, p.698c）

145）『師子荘厳王菩薩請問経』（T. vol.14, No.486, pp.697c~698a）

146）『仏説無量門微密持経』（T. vol.19, No.1011）など

147）『仏説八吉祥神呪経』（T. vol.14, No.427）など

148)『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経』（T. vol.21, No.1332）
149)『離垢慧菩薩所問礼仏法経』（T. vol.14, No.487, p.699a~b）
150) 慧立・彦悰『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻一「貞観三年秋八月将欲首塗」（T. vol.50, No.2053, p.222c）、巻六「起十九年春正月入西京」（p.252b）
151) 道宣『続高僧伝』巻四「京大慈恩寺釈玄奘伝一」（T. vol.50, No.2060, pp.446c~458c）
152) 玄奘『大唐西域記』（T. vol.51, No.2087）
153) 智昇『開元釈教録』巻八「大唐西域記十二巻〈見内典録貞観二十年奉勅於弘福寺翻経院撰沙門辯機承旨綴緝秋七月絶筆〉」（T. vol.55, No.2154, p.557b）
154) 慧立・彦悰『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻二「五百余里至颯秣建国〈唐言康国〉王及百姓不信仏法以事火為道」（T. vol.50, No.2053, p.227c）、「可汗出帳迎拜伝語慰問訖入坐突厥事火不施床以木含火故敬而不居但地敷重茵而已」（p.227b）
155)『旧唐書』巻一百九十七「列伝　南蛮　西南蛮　真臘国」（中華書局, 1974, p.5272）
156) 玄奘『大唐西域記』巻五「石精舎南不遠有日天祠祠南不遠有大自在天祠並瑩青石俱窮雕刻規模度量同仏精舎各有千戸充其灑掃鼓楽絃歌昼夜無徙」（T. vol.51, No.2087, p.896a）
157) 同上巻二「跋虜沙城東北五十余里至崇山山有青石大自在天婦像毘摩天女也聞諸土俗曰此天像者自然有也霊異既多祈祷亦衆印度諸国求福請願貴賤畢萃遠近咸会其有願見天神形者至誠無弐絶食七日或有得見求願多遂」（p.881c）
158) 慧立・彦悰『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』（T. vol.50, No.2053, pp.233c~234b）
159) 玄奘『大唐西域記』巻十一（T. vol.51, No.2087, p.937b~c）
160) 慧立・彦悰『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』「法師先以辞那爛陀諸徳及取経像訖罷論竟至十九日辞王欲還王曰弟子嗣承宗廟為天下主三十余年常慮福徳不増広法因不相続以故積集財宝於鉢羅耶伽国両河間立大会場五年一請五印度沙門婆羅門及貧窮孤独為七十五日無遮大施已成五会今欲作第六会師何不暫看随喜……中略……初一日於施場草殿内安仏像布施上宝上衣及美饌作楽散花至日晩帰営第二日安日天像施宝及衣半於初日第三日安自在天像施如日天」（T. vol.50, No.2053, pp.248b~c）
161) 煥然：正蔵の『大唐西域記』では「奐甚」（p.908a）
162) 玄奘『大唐西域記』巻七（T. vol.51, No.2087, p.908a）
163) 大憍：正蔵の『大唐西域記』では「大慢」（p.935c）
164) 為出世：正蔵の『大唐西域記』では「為世出」（p.936a）
165) 先哲後賢：正蔵の『大唐西域記』では「先賢後哲」（p. 936a）

166）同上巻十一（pp.935c~936a）

167）Monier の “SED” の “vasu” の項目に “N. of the gods（as the ‘good or bright ones, esp. of the Ādityas, Maruts, Aśvins, Indra, Ushas, Rudra, Vāyu, Vishṇu, Śiva, and Kubera）RV.; AV.; MBh.; R.;”（p.930c）とあることによるか

168）Monier の “SED” の “vasudeva” の項目に “N. of the father of Kṛshṇa, Mbh.; Hariv.; BhP.&c.;” とあり、また “of Kṛshṇa, Pañcar.;” とあることによるか（p.931a）

169）『旧唐書』巻百九十八「列伝百四十八」「泥婆羅国」（中華書局, 1974, p.5289）

170）『唐書』巻二百二十一「列伝百四十六」「泥婆羅」（中華書局, 1974, p.6213）

171）玄奘『大唐西域記』巻七（T. vol.51, No.2087, p.927a）

172）穌那天は反切からみると Śuna、あるいは Śunā の音写とみられ、堀謙徳『解説西域記』（前川文栄閣, 1912, p.100）でも Watters（“On Yuan-Chwang’s Travels in India”, London, 1904, p.127）により Śuna としている。桑山正進『ヒンドゥークシュ南北歴史考古学叢攷Ⅱ　新興バーミヤーンの時代』（臨川書店, 2023）では、この穌那天は『隋書』に見られる漕国の順天神で（p.151）、初期イスラム史料にみえる Zūr、あるいは Zūn に同定している（p.154）

173）桑山（2023）では、この阿路猱山の前身が『隋書』に見られる漕国の葱嶺山で、その葱嶺山に祀られていた穌那天が漕矩吒国の穌那呬羅山に移り、その神殿の上に太陽神の神殿が造られて阿路猱山と呼ばれるようになったといい、その神殿がカブール近郊のハイル＝ハナ（Khair Khaneh）遺跡に当たるという（p.151）

174）桑山（2023）では、この穌那呬羅山をギリシク（Girishk）北東のザミン＝ダーワル（Zamin Dāwar）地方の山岳にあるとする（p.154）

175）同上巻十二（p.939b~c）

176）大村が穌那天を Śoṇa とした理由が、この記述にあるものと思われる。Monier の “SED” では śoṇa を “the river Śoṇa or Sone（also ā, f.; it rises in Gondwana in the district of Nagpore, on the table-land of Amara-kaṇṭaka, four or five miles east of the source of the Narmadā［Nerbudda］, and running first northerly and then easterly for 500 miles falls into the Ganges above Pāṭali-putra or Patnā）” という（p.1091b）ので、大村はこれに基づいたのであろう。ただし、この Śoṇa 川（現在は Sone, Son）はインドの中央部を東に流れ、パトナでガンジス川に合流する川なので、穌那天と結び付けるには無理がある

〈キーワード〉波頗、智通、伽梵達摩、那提